2009年度 修了

写真を撮って見る行為の心理学的意味
－ 大学生・大学院生へのインタビュー調査からの考察－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
矢野　真美

写真は身近な表現ツールとして,現代では多くの人に利用されており,様々な特性を有することから多領域で活用されている。たとえば,報道写真における「情報発信」やアーティストによる「芸術表現」のほか,近年ではデジタルカメラやカメラ付き携帯電話の普及によって,ごく個人的なツールとしても一般的に活用されている。

心理学においても写真を用いた心理療法の事例などが存在するが,描画などの他の芸術・表現療法のように一般的なものとは言えない。カメラが小型軽量化して操作性も高まったことで,写真の利用は非常に簡便なものとなり,絵を描くなどの表現行為に比して写真を撮るという行為は手軽なものとなった。このことから,心理療法における非言語的交流の手段として,写真を用いることの可能性について検討することは,心理学的に意味のあることと考えられる。

本研究では,その前段階として,人がなぜ写真行為に至るのか,なぜ写真に癒されるのか,人が写真を撮って見ることにはどのような意味があるのかを明らかにすることを狙いとした。その方法として荒川（2005）を参考にした大学生・大学院生へのインタビュー調査を行い,学生が写真行為に至る背景を探るとともに,インタビュー結果と先行研究との対応から,現代の学生における写真行為の意味を心理学的に考察することを試みた。

インタビューをKJ法で分析した結果,荒川（2005）に示された考察と同様に，写真にはストレスを軽減する機能があることが示された。また,本研究で新たに明らかになったことは,「自己表現」や「自己確認」が学生の写真行為の目的としてあることや，写真を通した「コミュニケーション」や「視野の拡大」の体験されていることであった。さらに,それらの背景には写真の「デジタル化の影響」があることも示唆された。

学生の写真行為の目的を整理すると（a）記憶の代わり,（b）ストレスの軽減,（c）コミュニケーション,（d）自己確認,（e）自己表現,（f）気づき・発見の6項目が確認された。先行研究との比較検討から,これらの目的が過去の写真を用いた研究や治療事例においても見出され,写真の心理学的な有効性が示唆された。

さらに写真の特性については，他の芸術表現と比較した際に，写真には「表現性」や「主観性」だけでなく，事実を写し取る「客観性」や「記録性」の性質が相容れていることによって、その表現や行為の目的が特有のものとなっていることが示された。中井（1993）をもとにした考察からは，写真が構成法的かつ投影法的な表現である点や，その表現の自由度の高さに加え，安全性の高い技法として心理療法に利用できる可能性が示唆された。写真の短所も含めた様々な機能や特性を理解した上で，今後の心理療法における写真利用を展開していくべきであろう。